

中国口語文の成立における言語資料選別の基準：文化共生の観点から

西山, 猛

九州大学大学院言語文化研究院：助教授：古代漢語文法、近世漢語文法、日中対照言語学

<https://doi.org/10.15017/14871>

出版情報：言語文化叢書. 9, pp.115-120, 2004-02. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン：
権利関係：

中国口語文の成立における言語資料選別の基準

—文化共生の観点から—

西山猛

0.

中国において口語が文字として定着したのは何時からか、ということは現在ではよくわからない。ただ現在中国で使用されている中国共通語のもととなったものは、おそらく唐代に書面語として定着していったのではないかというのが、一般的な見方の方である。

なぜ中国の口語が文字として定着していったのか正確なことがわからないかという、それは現存する言語資料が絶対的に不足しているからである。しかしそれは中国において言語資料の絶対数が少ないという意味ではない。例えば唐代の詩を清の康熙帝の敕命によって編集した唐詩の総集『全唐詩』においては、作者二千数百人、作品数五万首近くを収めている。しかしそこに収められているものはすべて唐五代の詩であり、所謂「韻文」と呼ばれているもので、口語の文字定着が図られたものとは明らかに違う¹⁾。

また例えば唐代のあらゆる散文を清の嘉慶帝の敕命により編纂した『全唐文』においても収められた作家の数は三千人、作品数は二万篇にのぼる。しかしここに収められた作品も全て文語で書かれた、内容も限られたものであり、やはり口語の文字定着とは無関係なものと言えよう。

では逆に口語の文字定着が図られたと言っていい作品が全く生まれなかったかという、それも誤りである。ただそういった作品はほとんど現在には伝えられておらず、そのためそういった作品がもともと書かれなかったかのように見えるのである。

本稿はそういった状況の中で現在に伝えられている作品群、特に今から一百年ほど前に敦煌莫高窟で発見された文書が口語の文字定着に大きな役割を果たし、後の中国共通語の萌芽的な役割を果たしていることを論証したいと考える。そしてそういった作品が日本や朝鮮の口語文学にも強い影響を与えたということを文化共生の観点から述べてみたいと思う。その初歩的な考察である。

1.

中国口語がいつごろ文字定着を始めたか、について私はその前段階として漢魏六朝に中国に入ってきて翻訳されたいわゆる「漢訳仏典」がその後の中国口語文の成立に大いなる影響を与えたということを述べることにしたい。

ただ私がここで強調したいのは、漢訳仏典そのものが中国口語文として

成立したわけではない、ということである。

漢訳仏典は周知の如く後漢から六朝にかけて中国において漢訳された仏教関係の書籍である。一般にはこういった文献はより口語に近いものとされ、中古漢語の完成された形と見るようである。

例えば松江 1999 では人称代詞の複数形式について、一般的な文体の書物の一つ『世説新語』に比べて、漢訳仏典の『百喻經』に多く「等」が用いられるのは、『百喻經』の方がより口語に近いためという解釈を取っている。しかしそうであろうか。

漢訳仏典は文字通り一種の「翻訳文体」である。その当時の一般的な文体とは異なっていると私は考える。例えば『世説新語』で認められる二人称形式の一つとしては、「汝等」「爾等」「卿等」がある。それぞれ 2 例、1 例、2 例である。その一つを挙げる。

汝等雖佳，才具不多，率胸懷與語，便無所憂；不須極哀，會止便止；又可少問朝事。

(お前達は良い人間ですが、才能は多くはありませんので、胸襟を開いて話し合えば、憂いなどありません。度を越えた哀泣はせずに、鍾會が泣くのを止めたらすぐ止めなさい。また朝廷のことをあまり聞いてはいけません。)(『世説新語』賢媛 8、p.367)

ここで挙げられている形式は、三国時代の一般的な口語形式が現れているものと見て良い。まず「汝等」という新しい二人称の形式が登場し、それは子供達への言葉という口語を反映したものである。またこの当時の言葉としてそれ以降一般的になった「便」が使用されており、四言、五言を巧みに用いた文である。

それに対して『百喻經』の方はどうだろうか。こちらの二人称形式の形式は主に「汝等」「爾等」であり、それぞれ 4 例、2 例ある。こちらは 2 例を挙げる。

爾等所諍，我已得去。今使爾等，更無所諍。

(君達の争うものを、私は既に持って行った。これから君達は、もう争うことはない。)(『百喻經』 41「毘舍闍鬼喻」)

汝等莫去。我當爲汝白王，改五由旬作三由旬。

(お前達逃げ出すな。私がお前達の為に王に話をして、五由旬を改めて三由旬にさせていただこう。)(『百喻經』 34「送美水喻」)

漢訳仏典はこのように経典を内容に沿って翻訳したものである。基本的には四言の語句が多いが、翻訳不可能な助数詞のようなものは例えば「由旬」(梵語の「ヨージャナ」)のようにそのまま音訳している。一言で言えば、漢訳仏典は内容が正確に伝わればそれでよいのである。このように表

現を一目見れば、『世説新語』のように語句に工夫をしたものと明らかに違うということがわかるはずである。

今回二人称代名詞の例を挙げたが、そこからだけでも一般の文献と漢訳仏典の文体の差というものが窺えることが明らかになったはずである。

このように中古漢語の完成された形は漢訳仏典ではなく、『世説新語』のようなエピソード集の中に反映されているのである。しかしそれゆえにそれ以降の正統な文献はやはり古代漢語の枠組みの中からはみ出すことはなく、後世は文言という擬古的な文体の中で再生産されるという道を進むことになるのである。しかし助数詞を始めとして新しい語彙は次々と生まれてくる。その時却って漢訳仏典のように文献の基本形式と言えないものから新しい文体が生まれることになるのである。

2.

それでは次に唐代になり、どのような新しい文献が登場することになったか見てゆくことにしよう。

この時代の画期的な文献として敦煌莫高窟から 1900 年前後に発見されたいわゆる敦煌文書の存在がある。六朝から北宋までの文献等を収集したものだが、長期間人々の眼に触れることがなく、この百年において解読が始まったという経過があるせいも、二十世紀はこういった文献の整理に費やした百年だと言ってよい。

このうち中国語で書かれた文献に限って見てみれば、この百年の主だった成果として、1957 年に出版された『敦煌変文集』がある。それ以前はごく限られた研究者の間でしか見ることのできなかつたいわゆる敦煌変文を一般に見ることができるようになった。もちろん該書には誤字脱字や未収の文献等の遺漏があり、それはそれ以降の文献によって補充することになるが、『敦煌変文集』の出版はいわゆる「敦煌学」にとって画期的なものであった²。

私はこの文献によって唐代以降の口語文の成立の端緒が開かれたと考える。

『敦煌変文集』は内容から考えて三種の文献に分けることができる。まず仏教系の中でも「経文」とそれを解いた部分からなる「講経文」と呼ばれる文献、そして次にその中で「経文」のない仏教の内容をわかりやすく解いた「仏教系変文」、そして仏教とは直接関係のない「非仏教系変文」の三種である。

この三種のうち「講経文」については仏典そのものとの関係が深いものなので本稿では省略し、仏教系及び非仏教系の変文について例を挙げて説明を試みることにする。そして今回はその中でも口語文の成立に寄与した文法現象の一つ、「～不是～」について見てみたい³。

まず経文がなく仏教の教義がわかりやすく解かれている「仏教系変文」がある。一例を挙げれば以下の如くである。

佛者不是凡人，迦毘羅城淨飯王子，祖宗相次御千世之金輪，弈葉尊榮。
（『敦煌變文集』卷四「降魔變文」p.363）
（仏は凡人ではなく、迦毘羅城の淨飯王の子、先祖代々千世の金輪を御して、世々尊く榮えておられます。）

ここにおいて「仏は凡人ではなく」の部分に「不是凡人」という新しい表現が用いられているのがわかる。

そして次に「非仏教系変文」の例を見ることにしよう。以下の如くである。

又不是時朝節日，又不是遠來由喜，正午間跪拜四拜，學得甚鬼禍術魅！
（『敦煌變文集』卷二「舜子變」p.130）
（別に節句の日でもなければ、遠くから人が訪ねてきたわけでもないのに、昼間から何度もお祈りをすると、どんな鬼のまじないを学んだというのだ。）

この「節句の日でもなければ」等の部分に「不是」という表現が使用されている。

このように敦煌変文では仏教系のものから非仏教系のものまで広く「不是」という語彙が広まっていたことがわかる。そしてその表現が次の宋元の白話の文字定着にも寄与したことがこれまでの論証から見てとることができるのである。

3.

以上漢訳仏典は古代漢語ではいかにも翻訳文体で、例えば『世説新語』などの六朝の文献ほどの完成されたものを持ち得なかった。しかしそれゆえにその後の敦煌文書の成立の際には新しい文体を作る可能性を秘めることになったのである。そしてその資料は仏教系のものから非仏教系のものまで広範に涉り、その後の宋元における白話成立にも大いなる影響を与えることになったのである。

この口語文の使用は日本、朝鮮の文化にも広く伝わった。

例えば日本においては、中国の『水滸伝』の翻案であるとされる曲亭馬琴の「南総里見八犬伝」が発表された。それは江戸時代において、単に朱子学だけではなく広い意味での中国文化が日本に伝わってきたとされる好例である。

また朝鮮では、中国の三言二拍の翻案であるとされる『春香伝』が伝わったことはよく知られていることである⁴。

このように文言ではなく白話が日本や朝鮮に伝わったことは、日本や朝鮮の文化がただ単に儒学等の伝統的な学問のみの影響をうけたのではな

く、もっとさまざまな意味でのものを受け入れたということを示している。そしてそのことは単に過去のことを指すわけではない。これからも私達が相互に受け入れ合うであろう東アジアの文化共生についても大いなる可能性を秘めているのである。(2004年1月)

注釈

- 1 ただし唐代の詩においては特に盛唐以降いわゆる「詩語」と呼ばれる口語の色彩が強い表現が詩人間で流行することになる。詳しくは西山 2002 を参照のこと。
- 2 例えば『敦煌變文集新書』や『敦煌變文校注』等が挙げられる。その他このうちからいくつかの資料を選んだものとして、『敦煌變文選注』や『近代漢語語法資料彙編(唐五代卷)』等がある。
- 3 「～不是～」は前述の如く唐詩において盛唐以降の詩語の一つとして現れるが、口語として広く文書中に現れるものはこの敦煌文書からである。ちなみに肯定形「～是～」の成立については六朝期において既にその萌芽が見られるがここでは述べない。
- 4 『南総里見八犬伝』と『春香伝』はともに岩波文庫に校訂本、日訳本がある。『春香伝』翻案の経緯については沢田 1982 を参照。

テキスト

- 『大正新脩大藏經』(高楠順次郎他編、大正一切經刊行會 1924・1934 年本)
『敦煌變文集』(王重民他編、人民文学出版社 1957 年本)
『敦煌變文選注』(項楚著、巴蜀書社 1990 年本)
『敦煌變文校注』(黃征、張涌泉校注、中華書局 1997 年本)
『敦煌變文集新書』(潘重規編著、文津出版社 1994 年本)
『近代漢語語法資料彙編(唐五代卷)』(劉堅・蔣紹愚主編、中華書局 1990 年本)
『南総里見八犬伝(1～10)』(曲亭馬琴作、小池藤五郎校訂、岩波文庫 1990 年本)
『春香傳』(許南麒譯、岩波文庫 1956 年本)

参考文献

- 沢田瑞穂 1982 『宋明清小説叢考』(研文出版)
- 松江崇 1999 「『六度集經』『佛說義足經』における人称代詞の複数形式」(『中国語学』246、pp.11-21)
- 西山猛 2002 「唐代における動詞『話』の成立」(九州大学大学院言語文化研究院『言語文化論究』16、pp.117-123)